

## “賢者と愚者”

山田 英二（色染昭和35年卒）

### § 1. はじめに：

世の賢人達は「賢者」と「愚者」をどの様に考えているのであろうか。哲学者・西部邁、仏教学者・佐々木閑、脳科学者・中野信子の3人の著書を通じて考えてみた。それらの書籍というのは、西部邁の「思想の英雄たち」、佐々木閑の「ブッダ 真理の言葉」、中野信子の「世界の頭のいい人がやっている事を1冊にまとめてみた」である。

### § 2. 西部邁の主張：

西部邁は著書「思想の英雄たち」の中で、エドモンド・バークを初めとする15人の思想家たちの言説を、我々が今を生き抜くための精神的な糧にすべきであるとして紹介している。即ち、いかなる方向に臨めば日本が文化的小児病から脱することができるのか、そしてその果てに日本文明の成熟を望みうるのか、保守的自由主義の源流エドモンド・バーク、「大衆」に関してそれを「奇怪」なる存在と捉えていたキルケゴール、民主主義を批判したニーチェなど、15人の思想家たちの言説を、私たちが今を生き抜くための精神的な糧にしようではないかと述べているのである。

その著書「思想の英雄たち」の中で、特に哲学者オルテガの言葉を引用、自説をまじえながら解説しており、興味を抱いたので以下にご紹介したい。

『賢者は自分がもう少しで愚者になり下がろうとしている危険をたえず感じている。その為、彼は身近に迫っている愚劣から逃れようと努力するのであり、その努力の内こそ英知があるのだ。ところが愚者は自分を疑うことをしない。彼は極めて分別に富む人間だと考えている。愚鈍な人間が自分自身の愚かさの中に腰をおろして安住する時の、あのうらやむべき平静さはそこから生まれている。愚者にその愚かさの殻を脱がせ、しばしの間、その盲目の世界の外を散歩させ、日頃の愚鈍な物の見方を、より鋭敏な物の見方と比較するように強制する方法は無いのである。馬鹿は死なねば治らないのであり、救いの道はないのである』

『即ち、自己懐疑（自分は本当に正しい事をしているのか、謙虚に反省する事）の有無が、大衆（愚者）と、選良（賢者）を隔てるとオルテガは考えた。

現代の特徴は、凡俗な人間が、自分が凡俗であることを知りながら、敢然と凡俗である事の権利を主張し、それをあらゆるところで押し通そうとするところにある。大衆は大衆でないものとの共存を望んでおらず、徹底的に憎んでいるのである。民衆のあいだには、ありとあらゆる優れたものに対する低俗な恨みがあり、彼らは優れた人物に対して一切の熱狂と社会的貢献を拒否した後で、“人物はいない”という。

日本の大衆社会は、オルテガの様な大衆批判の思想を一顧だにしないまま闇に葬ったという意味で、実に高度の段階に達している』

『今の日本に「満足が原因で死滅する」という時代の兆候が目立ちつつあると私（西部邁）には感じられる。そこに密かに胚胎する「異様な悲哀感」を察知するのは主として知識人の仕事であろう。ところが大方の知識人はなおも安楽の為の処方箋を書く事に忙しい。オルテガはその様な人種をあっさりと偽物と呼んだ。知識人が我慢できないのは、今日地球上に充満している偽物である。文筆家、科学者、大学教授、哲学者というマスクをつけた、非知識人がうようよしているからである』

『大衆人であることは、私（西部邁）もずいぶん経験したところなのだが、その人の生を空洞化させることだ。目前の安楽に飛びつくやり方は、早晚、その人を虚無の気分へと誘い込み、虚無の底へ引き込まれるのを避ける為には、人々は目前において流行している束の間の価値（世論）にすりよるしかない。それは結局、安楽とは逆のものをもたらさずにはいない。オルテガ、彼は今もなお人間の生のありうべき輝かしさを照らし出す思想の光源である』

このオルテガと西部の思想を読みながら考えたのは、会社経営（者）も同じことではないのかと言う事である。

即ち、賢者を賢社（優良企業）に置き換え、愚者を愚社（不良企業）に置き換えて考えるのである。優良企業の経営者は、現状の会社経営がいかに順調であっても、いつ何時、某化粧品会社やホテル・百貨店の食品偽装の如き危機に直面するか分からないし、自分自身がいつ何時、病に倒れるかも分からないと言う危機感を持って常に努力している筈である。賢者的経営者は仮に会社経営が好調であったとしても、その上に安住する事なく、贅沢や無駄を排し、堅実な経営を心掛けるであろう。

又、あるプロジェクトが順調に行くかどうか懐疑的であり、仮に順調に軌道に乗ったとしても、いつ何時どの様な危機が訪れるかもしれないという危機感を持って堅実な経営をしておれば、本物の危機を回避出来るであろうし、いざ危機が到来しても切り抜ける段取りが直ぐ出来るということであろう。経営賢者は自らの経営能力の限界を自覚し、他者の意見に耳を傾け、日々謙虚に反省すると共に、困難に挑戦して行く事であろう。

人には必ず長所・欠点があるものである。欠点のない百点満点の人間が居るとすれば、それは神様であろう。自分を神様の様に思っている自信過剰の人は裸の王様に成り下がり、人々から軽蔑され敬遠されるであろう。長所・欠点があること自体は問題でない。問題は自分の欠点に無頓着な上に、他者をけなし自己主張する人であり、それを愚者というのであろう。賢者の有する素質をキーワード的に言えば、「自己懐疑」「危機感」「謙虚」「反省」「思いやり」であり、賢者とは、失敗を謙虚に反省する事によって失敗を繰り返さないだけでなく、“**失敗は成功の源**”となす人の事を言うのであろう。

以上、西部邁は哲学・思想的側面から賢者と愚者の人物像を示しているが、仏教の教えに於ける「賢者」と「愚者」はどの様になっているのであろうか？

### § 3. 仏教（ブツダ）の教え：

聖人と呼ばれた人は多くの素晴らしい事を述べており、後世、弟子たちが記録を残している。例えば、儒教の開祖・孔子の語録が「論語」となり、イエス・キリストの言行録が「新約聖書」の中の「四福音書」となって残っている。

お釈迦様（ブツダ）の教えを弟子が書き残したと言われる『法句経』は、数多のお経の中でも最も古い信頼性の高いお経の一つと言われている。その内容は、人生訓と言ってもよい分かり易い言葉で、仏教に従って生きる者の基本的心構えを示しており、26分類、423偈によって綴られている。その中の第5分類が愚者（60～75偈）、第6分類が賢者（76～89偈）になっている。『法句経』には、例えば、

『ためになることをいくら沢山語っていても、それを実践しなければ怠け者である。それは例えば牛飼いが他人の牛の数を勘定しているようなものだ』（19偈）

『怒らない事によって怒りに打ち勝て。善い事によって善からぬ事に打ち勝て。布施する事によって物惜しみに打ち勝て。真実によって嘘つきに打ち勝て』（223偈）等の言葉が423偈綴られており、お経の言葉とは感じられない内容であるが、パーリ語の原文はきれいなリズムと韻を含み、声を出して詠むにふさわしい文章となっている。

扱、「賢者」と「愚者」については、どの様に述べているのであろうか。

先ず【愚者】について述べている事を幾つかピックアップすると、

『眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い』（60偈）

『愚か者が、自分を愚かであると自覚するなら、彼はその事によって賢者となる。愚か者が自分を賢いと考えるなら、そういう者こそが愚か者である』（63偈）

この文章は所謂、「無知の知」を指摘しており、オルテガと同じ様な事を言っている。

『愚か者は生涯賢者に仕えても、真理を知る事が無い』（64偈）

『聡明な人は瞬時のあいだ賢者に仕えても、直ちに真理を知る』（65偈）

『愚か者は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧の間では上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行っては供養を得ようと願うであろう』 一方【賢者】については例えば以下の様に述べている。

『真理を喜ぶ人は、心清らかに澄んで、安らかに臥す。聖者の説きたまうた真理を、賢者は常に楽しむ』（79偈）

『一つの岩の塊が風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛に動じない』（81偈）

『高尚な人は、どこに居ても執著する事が無い。快樂を欲してしゃべる事が無い。楽しい事に遭っても、苦しい事にあっても賢者は動ずる色が無い』（83偈）

我々は多くの煩惱（無明）に惑わされて、様々な愚行に走り、悩み苦しむが、煩惱には除夜の鐘を撞く数・百八つもあると言われている。その中で特に重要な煩惱は「執著」である。即ち、「金銭への執著」「出世への執著」「権力への執著」「美しさへの執著」等、数えあげればきりが無い。一つの欲望を満たすと、次から次に欲望が膨らんで、果てもなく貪欲になってしまうのが人間の現実であって、それが愚者の姿である。

愚者は、「私には息子がいる」「私には財産がある」などと言って思い悩むが、「諸行無常」（世の中のものは全て常にうつろう）の真理に照らせば、自分自身がそもそも自分のものではなく、自分はどこにもないのである。子供を自分の所有物だと思っただけから執著が湧き、自分の思い通りに動かしたいという欲望が生まれるのである。

即ち、「執著」とは、自己中心の世界観から発生するのであって、自分中心の考えに立つ限り貪欲な欲望は消えない。中心人物たる自分を本質の無い仮想存在と認識出来れば、まわりにある所有物も自然に消えてしまい、執著も自ずから消え去る事であろう。

この事を体現する言葉を「諸法無我」（全ての存在に、自我なるものはない）と言い、『諸法無我と知恵によって見る時、人は苦しみを厭い離れる。これが、人が清らか（賢者）になる為の道である』（279偈）

賢者は「諸行無常」「諸法無我」の2つの真理を理解・習得して実行出来る人であり、その結果、無明（執著）の束縛を断ち切り、世の中を正しく見るようになり、誤った世界観から生まれる様々な苦しみから脱却出来るというのである。

賢者の仲間入りする為に、或いは、賢者に少しでも近づく為に心がけるべき事は何かをお釈迦様（ブツダ）は分かり易く教えてくれている様に思われる。

#### § 4. 脳科学者・中野信子の賢者に関する見方：

中野信子は東大大学院で脳神経医学を専攻して医学博士号を取得した後、フランス国立研究所に勤務した才媛（賢者）である。世界的に評価されて活躍している多くの賢者と交流した知見から『逆境を自分の味方にして、したたかに生き抜いていく』のが『世界で通用する、本当に賢い人の要件』であるとして、日本人にはそれが足りていないのではと感じたそうである。『世界で通用する頭のいい人』というのは、ただの秀才ではなく、脳のメカニズムから見て理にかなっている事をやっているという。それらの賢者がどのような人物なのか、中野信子が知り合って観察した天才的賢者の人物像として31項目を列記しているが、その内、5人の具体例をピックアップしてご紹介したい。

☆賢者A：「“空気は読まない”事で己を貫いている」「苦手な事はきっぱりと断り、自分が好きな事、得意な事を貫いている」「苦手な所を克服する為に時間やエネルギーを使うのではなく、自分の得意な分野を誰にも真似のできないレベルまでブラッシュアップすると共に、その方面で自分の能力をフルに発揮している」⇒この方法は、

良い結果を出すには理にかなっており、総花的に色々抱え込んでしまっただけは、收拾がつかなくなって、良い結果は残せないと筆者（中野信子）は言う。

☆賢者B：「能ある鷹は爪を隠し、あえて勝ちを譲る」「相手に花を持たせることで、能力の高さを見せつける」「天才ながら、わざと普通の人のふりをする」事ができる人である。⇒このやり方は、筆者にとって繊細な知性を感じさせるものであった。

☆賢者C：「話し上手より聞き上手。知らない内に、相手を自分の思い通りに動かしている」⇒人は誰でも自分の話を聞いてくれると嬉しくなる。相手をすっかりいい気分にして、自分の言う事を聞いてくれやすいようにしておき、その裏で自分が誘導したい目的地に話を持って行く交通整理をちゃっかり進めている。

☆賢者D：「適度なストレスを自分に与えている」「試験やプレゼンなど、アウトプットを持ち、自分を追い込むことで成果を残してきた人」である。⇒ヤンキーズ・ドットソンの法則という心理学の基本法則によると、ストレスが強すぎても弱すぎても記憶や知覚のパフォーマンスが低下してしまう事が分かっている。適度なストレスは学習パフォーマンスを最高レベルに高めてくれるのである。

☆賢者E：「逆境に遭遇しても、周りの人や環境のせいにした愚痴を全く言わない」「どんな悪人からも学んで、自分の力にしていこうという能動的な攻めの生き方を身に付けている」⇒現状否定よりも現状の有効活用を考え、希望を持ち続ける事は脳を若々しく保つ上で重要であり、この点は脳科学の研究でも実証されている。

## § 5. おわりに：

西部邁は思想・哲学的側面、ブッダは心（煩惱、苦楽、悟り）の側面、中野信子は脳科学的側面からからみた「賢者」の人物像を示しており、3者3様の言葉（表現の仕方）で述べられているが、「謙虚」という点では共通している様に思われる。

「賢者」とは“能ある鷹は爪を隠している”のではなく“元々爪を持ってないと自覚している人”ではないだろうか。その事は「謙虚」に学び続ける原動力となり、「賢者」に帰結するのではないかと思われる。いずれにしても、3者の論者は、なるほどと思いつける良い教訓が多いと思った。この歳（卒寿）になって「愚者」である事を反省しても手遅れと思うが、残り少なくなった人生を、「愚者」のまま人様にご迷惑をかける生き方をしない様に、可能ならば、少しでも「賢者」に近づく努力によって（小さな幸せをばらまく努力によって）有終の美を飾りたいと願っている。 以上

## 【引用文献】

1. 西部 邁著『思想の英雄たち』～保守の源流をたずねて～（2012年）
2. 佐々木閑著『ブッダ 真理のことば』（2012年）
3. 中野信子著『世界の頭のいい人がやっていることを1冊にまとめてみた』（2021年）